

新譯 水滸傳

佐藤春夫





新譯

水滸傳^{すゐこでん}

第八卷



夫 春 藤 佐

社 論 公 央 中

新譯水滸傳

昭和二十八年九月二十日 印刷
昭和二十八年九月二十五日 發行

第八卷 定價二五〇圓

譯者 佐藤春夫

發行者 栗本和夫

東京都千代田區丸之内二ノ二

印刷者 中内佐光

東京都千代田區飯田町

發行所 中央公論社

東京都千代田區丸之内二丁目
丸ノ内ビルディング五九二區

電話 和田倉 一一二番
振替口座 東京 三四番

目

次

第八卷

第六十八回

宋公明 曾頭市を夜討ちし
盧俊義 史文恭を活捕りす

七

第六十九回

九紋龍 誤つて東平府に囚れ
宋公明 義もて雙鎗將を扱ふ

三

第七十回

沒羽箭 礫を飛ばして英雄を打ち
宋公明 糧を捨てて壯士を捕ふ

五

第七十一回

忠義堂に石碣 天文を受け
梁山泊に英雄 座次に排ぶ

七

第七十二回

柴進 花をかざして禁院に入り
李逵 元宵の夜に東京を鬧がす

一〇

第七十三回

黒旋風 いつはつて鬼を捉へ
梁山泊 生首を二つ献ぜらる

一七

第七十四回

燕 青 智をもて擎天柱を撲ち
李 逵 装ひばけて壽張縣に坐る

二三

第七十五回

活閻羅 船を水にして御酒をぬすみ
黑旋風 詔を裂きて欽差をのしる

一七

第七十六回

吳加亮 四斗五方の旗を布き
宋公明 九宮八卦の陣を排ぶ

一六

第七十七回

梁山泊 十面に兵を伏せ
宋公明 童貫を再び破る

三六

挿 畫 投手張清

史進捕はる

口 繪
面 六

鐵牛知事

一七

口繪・揮畫・裝釘

小杉放庵

新
譯
水^{すゐ}
滸^こ
傳^{でん}

第
八
卷

第六十八回

宋公明 會頭市を夜討ちし
盧俊義 史文恭を活捕りす

さて、その時、段景住は駈けつけて、林冲等にかたるやう――

「あっしや楊林、石勇と、北方へ馬の買ひだしに出かけて行きましたが、あちらで足のはやい、力のたくましい、毛並のりっぱな駿馬をえらび出し、そいつを二百匹あまり手に入れて引きかへし青州までまゐりますと、一團の追剝ぎにぶつかりました。險道神の都保四といふやつが頭目で、二百人あまりを狩り出して襲つてかかり、馬をぜんぶ奪ひとつて、會頭市へ牽いてつちまひ、石勇も楊林も行方知れずとなりましたので、あっしや夜晝なしにオッ飛ばして、お知らせにもどつて來たのでした。」

「まづ」と關勝がその時、云つた。「山寨へひきあげ、兄貴にあつて、そのうへでの相談だ。」

一同は渡しをわたつて、のこらず忠義堂にあつまり宋江に對面する。關勝は單廷珪と魏定國を、大のかしらたちに紹介した。李逵もまた山からくだつて行つて韓伯龍を殺し、焦挺と鮑旭にであひ、ともに凌州ふみにじりの一伍一什をものがたつた。宋江は聞きをはつて、又も四人の好漢を仲間に加へたのを喜んだが、折から段景住が馬を横取りされた一件を事こまかに持ち出すと、宋江は、

「さきにもこももの馬をかすめ、今また、かさねがさねのこの仕打！ 晁天王のために、また讐も

うたないで、朝夕、晴れた氣もしないでゐるのに、このまま、ちっとしてゐるのぢや、うしろ指をさされるだけだ。」

かう云つて、怒りだした。

吳用から、

「春も暖かになり、いくさには、もつてこいの季節です。このまへは攻めて出で、痛い目をみましたから、こんどはせいぜい智略をめぐらしませんことには。」

と云はれても、

「骨の髄まで、しみた恨みだ。晴らさぬことには戻るものか！」

吳用はさらに、

「時遷は隱密のきく奴です。一まづ、奴をつかはして動靜をさぐらせ、もどつたあとで工夫しませう。」

時遷はすぐと發つたのである。

それから二三日經つたかたないかの時分、楊林と石秀とが、ふらりと逃げてかへり、曾頭市の史文恭が大口をたたき、梁山泊とは兩立できないとほざいてゐるはなしを傳へた。宋江はあせつて出兵しようとする。

「お待ちください、時遷が立戻つてからでも遅くはないので。」

と吳用がなだめても、憤りで胸がふさがり、この仇を討たぬことには片時も居たたまれずと、ま

たまた戴宗を、様子をみてすぐと知らせに戻るやう、出發させてやつたものである。戴宗は數日のあひだに先きにもどり、

「曾頭市では凌州の仇討だとぬかし、いくさをはじめめる下心で、いまや村の入口に大寨をまうけ、總司令部を法華寺に置き、旗じるしを數百里に立てつらねてゐますので、どちらの方角から、どう攻めたものかも見當はつきません。」

時遷も、その翌日かへつて來て、

「あつしや曾頭市の中まで、へえつてつて、根こそぎ探つてきやしたが、陣所は五ヶ所できてやして、曾頭市の前の側では二千餘人が村の口をかためてゐます。本陣は武衛の師範の史文恭があつかり、北の陣には曾塗と、二番師範の蘇定とが居すわり、南の陣には次男の曾密、西の陣には三男の曾索、東の陣には四男の曾魁、中の陣には末っ子の曾昇が親父の曾弄といつしよに居ります。それから青州の都保四つてのは、身のたけ一丈、腰のまはりのでっぷりした奴で、あだ名を險道神將といひますが、奪つて行つた、たくさんあの馬は、法華寺に追ひこんで飼つてゐます。」

吳用は聞きをはつて諸將をあつめ、

「むかうで五つの陣を置いたとすれば、こちらでも隊を五つにし、五手にわかれて掛つて行かないことにはなるまい。」

盧俊義は起ちあがつて、

「わたくし救助をたまはつて、山にまゐりましてより、まだ寸功もございません。ついては、これ

から攻めて出たいと存じますが、いかがでせう？」

宋江はよろこんで、

「あなたが下山してくださるなら、ぜひ先鋒せんぽうになつていただきます。」

吳用はそれを諫止かんしした。

「山寨にお見えくださつたばかりで、いくらのご経験もなく、山はけはしく、乗馬にはたよりも悪しく、先鋒はご無理かと存じます。つひては別に一隊をつれ、伏勢ふせいとして、平地にでて、司令部の砲聲で、斬つて出ていただきます。」

ほかでもない、吳用は盧俊義が史文恭をとらへたならば、宋江が晁蓋あふだいの遺言ゆいごんどほり、位を彼に譲ゆづらうかと、おそれたからで、さてこそ、彼の先鋒を拒んだのだ。宋江は淡淡とした氣持で盧俊義に功をたてさせ、それを好機こうきに、かれを山寨の主にしようと考へたが、吳用はあくまで承服じやうふくせずに我を立てとほし、盧の旦那には燕青えんせいをつけ、五百の歩兵をひきゐて出で、平地の小道で待機たいきさせることとした。つづいて兵は五隊にわかれ、曾頭市の南の陣には、騎兵のかしらの霹靂火へきれきくわの秦明しんめい、小李廣の花榮、副將に馬麟ばりん、鄧飛とうひが兵三千で。東の陣には歩兵のかしら花和尚の魯智深、行者の武松、副將に孔明、孔亮が兵三千で。北の陣には騎兵のかしら青面獸の楊志、九紋龍の史進、副將に楊春、陳達が兵三千で。西の陣には歩兵のかしら美髯公びぜんこうの朱全、挿翅虎さしこの雷横、副將に鄒潤そうじゆん、鄒潤が兵三千で。また、まんなかの本陣には總大將の宋公明、軍師の吳用、公孫勝、隨行の副將に呂方、郭盛、解珍、解寶、戴宗、時遷が兵五千で。それぞれに攻め寄せることとなり、しんがりには歩兵のかしら黑旋風の李逵、

混世魔王の樊瑞、副將の項充、李袞が歩騎兵五千をひきゐて出で、他のかしらは残つて山寨のかために當ることとなつた。

宋江が五つの部隊を、かうして堂堂と出したいきさつは、まづこれだけとして、一方、曾頭市では、さぐりのものが嗅ぎつけて、知らせにもどつて行つた。曾長官が師範の史文恭と蘇定とをまねいて、いくさの機密をたづねると、史文恭は云ふのであつた――

「梁山泊のがうせやがつたなら、おとしあなを、やたらに掘つておくことですよ。あばれ者は、さうしてこそ捉へることもできるのだから。あいつら山賊どもを相手には、これが何よりの上策でせうて。」

曾長官は莊客や食客に、鋤や鉞をかつがせて出し、村の口に數十ヶ所も陷穽を掘らせ、かるく土で蓋をし、そこら中には兵を伏せて、敵の到着を待つた。曾頭市の北口にも、おなじく十幾つかの陷穽ができたのであつた。

宋江が、山を出るをり、吳用はひそかに時遷をはなつて、も一度、様子を見させにやつた。時遷は數日にしてたちかへり、

「曾頭市では村の南と北との口に、べたいちめんの、おとしあなを用意して、それが幾つあるか知れず、あつし等を待つてゐますぞ。」

吳用は

「何だそれしき！」

と大笑し、軍をしたがへて前進した。

曾頭市に近づいて、ちょうど午じぶんになると、前隊のものの目に、はるかに一騎の姿がみえた。馬はうなじに銅の鈴をさげ、尾に雉尾のかざりをむすび、馬上の一人は青頭巾に白袍のいでたちで、短鎗を手にとつてゐる。前隊はただちに追つて出ようとした。呉用はそれをひきとどめ、その場に陣を布かせ、そのまはりに塹壕をまうけ、鐵のさかもぎをあしらひ、他の部隊にも、おのおの陣について同じやうに塹壕とさかもぎとを用意させた。

そのまま三日の日は経つたが、曾頭市では戦ひに出て來ない。

呉用はまたも時遷を、伏勢のこものに仕立てて、曾頭市の陣に入れ、相手が出ないわけをつきとめ、陷陣をひそかにしらべて、陣からどれほどの距離のところに、すべてでいくつ掘られてゐるかまで、調べさせてみたのである。

時遷は行つて、たったの一日で、事情をつぶさにさぐり、陷陣にはそつと目じるしをつけてひきあげ、軍師に復命した。

呉用はつぎの日、令をつたへ、前隊の歩兵に命じ、おのおの鋤を手にかけて二隊にした。輜重の車の百餘臺にも、葦やたき木を積みこんで司令部にかくして置き、その夜、各陣地のかしらたちに連絡して、あくる日の巳牌じぶん、東西二手の歩兵隊を、まづ敵陣にさしむける事とし、さらに曾頭市の北の陣にかかつて行く楊志と史進にも、騎兵を一字にひろげるだけで、敵が太鼓や旗などを持ちひて、どう虚勢を張り挑まうとも、應戦しないやうにと呉用は指圖をしをはつた。

こちら、曾頭市では史文恭が、もっぱら、宋江がたの攻勢をまつて、穴におとすつもりであつた。

陣前の道は狭くおとしあなはまぬかれないといふ算段なのである。すると翌日、巳牌に、陣地のむかうから砲聲がきこえて、くりだしてきた大部隊が、南門へなだれかかつた。つづいて東の陣からは、報告のものが駈せつけて、

「一人の坊主が鐵の禪杖をふりまはし、も一人、行者が戒刀を二本でチャンチャンバラバラ、前隊からおし掛けてきました。」

史文恭は

「その二人が、梁山泊の魯智深に、武松なんだ。」

と、まちがひのないやうに、助太刀の部隊を會魁の方へいそがせた。

折から西の陣からも報告があつた――

「聶のながい、ごついのと、虎の面した奴が、『美髯公朱全』『挿翅虎雷横』とかいた旗をぼつたて、ものすごく攻めたててまゐりやした。」

史文恭は、そちらへも人を出して、曾索を助勢させた。

陣のかなたでは、又しても砲聲である。史文恭は、つひぞ兵はうごかさず、相手がたがとび出してきて、陷穽にはまるのをキッカケに、山の背に伏せ置いた兵で、おそひかかるつもりなのである。こちらでは呉用が騎兵を山のうしろへまはし、二手にして陣前へ奇襲をこころみさせた。敵の歩兵は陣を守つてはなれず、兩側の伏兵も陣前に置かれてゐるだけである。呉用の部隊は背後から突いて出

て、彼等をみな、おとしあなへ追ひおとした。史文恭が出ようすると、吳用は鞭をさしかざした。身方の本陣では銅鑼が鳴り出し、百餘臺の車が押し出され、一齊に火がつけられた。積まれた葦や、たき木や、硫黄や、焰硝がいちどきにめらめらと燃えだして、煙が空をくらくする。繰り出した史文恭の手勢のものは、悉くこの火のくるまに遮られ、立ち往生させられて、いそいで、かへして行かうとすると、公孫勝がはやくも陣中で剣をかざし、呪文をとなへ、大風を吹かせたので、焰はみるみる煽られて、南門へ飛火し、ものみの樓を一つ一つ焼きおとして、りっぱな勝利を占め、鉦をならして兵をまとめ、それぞれに陣に入つた。その夜はそれで休息。史文恭はいそいで陣門をたてなほし、雙方對陣したままである。

つぎの日、曾塗は史文恭に

「まづ賊のかしらから斬らぬことには、かたがつかぬ。」

と、陣地は史文恭にまかせて、曾塗自身、陣頭に立ち、鎧をつけ馬に跨つて、打つて出で挑みかかつた。宋江は司令部にゐて報告を受けると、呂方と郭盛をともなつて出陣したが、門旗の下に曾塗のすがたをみとめるや、さきの日の口惜しさがよみがへり、鞭でさして、

「誰か奴をひつとらへ、さきの恨をはらさぬか！」

小溫侯の呂方は、いきなり、乗馬ををどらせ、手にした大矛で、たつたと曾塗にかかつて行つた。馬は馬と相きほひ、わざものは互にあげられ、戦つて三十合あまり。

郭盛は門旗の下にゐて、二人のいづれが勝つだらうかと見詰めてゐたが、呂方はもともと腕前では